詩集

私の植物誌

和仁市太郎

高山・すみなわ詩社刊

詩集 私の植物誌 和仁市太郎

すみなわ詩社

詩集

私の植物誌

和仁市太郎

私の植物誌

道

生きているものは我が家のものばかり
先刻午前二時をうった時計の音が耳朶の底に余韻を残し
　ている
印刷機のローラーや機械を丹念に拭き潔めて屋外に出る
　と
もう四辺は静寂でちかくの寮もアパートの窓の明りも消
　されて
平安な夢路をおもいおもいにたどっているのであろう

誰しも選んだ一つの路に　ひとかけらの懐疑の想いも抱
　かず

不信も疑問ももたず平易に半世紀も生き抜くことは稀有
　のことであろう
戻れるものなら　出発の日の若い二十歳の日に　立ち返
　れるものなら
改めて人生の振りだしの日に戻したい　返してみたい
自分なりに私を精いっぱい生かしてきたつもりであった
　が
人生の黄昏にたどりついたいま越しかたを振り返ると
もっと自分を生かしきれた別の生きかたがあるように悔
　やまれてならない
この半端な愚直な生きかたは自分ひとりでよかったのに
血を分けたものをまた一人　後につづくものをつくって
　しまった
優柔な利己的な判断で不幸な道を強いるのではなかろう
　か

石鹸の泡でインキの汚れを丁寧に洗っていると
庭の隅のかすみ草が白い花を這うように咲かせ
そこだけが仄かに明るく夏の夜の短かい生命を咲きつづ
　けていた。

――四三・七・二〇――

埋没

久しぶりに雪にうずもれた郷里に帰って
弟たちとよもやまの話しを語っていると
どことなくこのごろ貫録を身につけてきた弟は
一歳(ひとつ)ちがう兄のわたしにこんなことをいう
「城したの父のお墓を高山に移したら！
　再来年は父の五十年忌もくることだし……」
わたしの子供たちが長いあいだ墓詣りにも
帰らないのが不足らしい口吻である

母が生きているあいだ――八十歳になろうとする母がと
　みに病床につく日が多いこのごろ

町を見おろせる墳墓の地にそっと父を眠らせておきたい
　という
わたしのひそかな冀いがわからないのだろうか

父が死んで半世紀ちかく　自分も老い弟妹たちもそれぞ
　れの位置に世を処してきた
もうおん骨は風化され幽暗の墓地の湿った遮断された太
　陽の下で
白くむなしい破片となって眠っていられるのであろう

埋没という言葉がこのごろ脳裡から消えない
生きていても世の中の人たちから忘れられ
巷の塵にうごめき埋没されている生きかたの人もあるの
　だが。

――四一・九月改作――

生と死と

限界のある年齢の谷間にきたからではないと思う
この想いは六歳の正月を迎えた元旦の臥床(ふしど)に
とつぜん奔湍となって小さい肉体におし被さってき
体内にながい間棲みついた奇縁の生と死の相剋であった
奈落の底につき落され孤絶のなかに埋没する純粋なる時
　間
寂寥の煉獄に独りでもてあます魂の戦きである
孤独では堪えてゆけそうもない　さればといって群衆の
　なかではなお解決も納得もゆかない
この窮り果てしない生きている夜の恐怖と生きている夜
　の祈念(いの)り

五十年はこの無明にたちふさがる壁にむかった愚かな足
　跡であった
寝ねられぬ暁闇の褥に夜明けの訪ずれを待ち設けると
あたりを明るく太陽は窓の障子にやってきて挨拶する
昨夜(よべ)の懊悩はうそのように晴れ霽れと目を覚まし
昨日とおなじ日課で自分の思想を盲目(めしい)にし妥協して働か
　ねばならない
庭にでると秋が忍びよった気配に芙蓉のほの紅い花瓣が
羞じらう処女のように生きている証(あかし)を風にささやいてい
る。

――四三・九――

幸せ

――孫の直子に――

私の八歳の秋　三十六歳の若さで死んだ父は孫を抱いた
　ことを知らない
言葉をかえれば　父の短い生涯は人間の一つの面でしか
　生きていない　生きられなかった
まだ若い青年のような私に　四人もの孫があると知った
　らきっと世間の人が驚愕するだろうが
自分に新しく四人の子供が生れ　殖えたと　この頃思う
　ことにしている
生れて六ヶ月たちこの頃顔をおぼえ　笑みかけてくる直
　子を

冬のすきま風がしのびよる寒い風呂場で
膝の上に抱きあげて無心に洗っていると
すべすべと宝玉のように柔らかく　これから生き抜く世
　のなかに挑むように
多くの望みと稚ない芽を溢れさせ　無垢のこころで手脚
　を活潑に動かしている
くびれた掌や　細いきゃしゃな頸　充実した丸っこい背
　なか
こんな尊い清浄な仏のように敬けんな重量感のある裸身
　に
私の父が知らなかった法悦にも似たこの幸福は　しばら
　く忘我の境いにおく。

――四四・一・一〇――

生きる

五万すこしの小さい山の町で　大きい声で呼ぶと木霊して
町じゅうの人びとに届きそうな盆地のせまい町なのに
あなたにはもう二十年ちかくもお遭いしていない
あなたの貌はおぼろげで記憶のそとに呆けてしまった
あなたの通られる街の往き来がきっと
印刷用紙やインキを購いにゆく道と違っており
注文をとり印刷物を届ける午前の街の雑踏する時間とは
わたくしとあなたの邂逅を遠うざけ
不思議とすれちがわせているのであろう
町で発行される週刊の小さい新聞紙の「おくやみ欄」に

目がすわれ
憑れたように探してはあなたの名前を紙面に拾うのだが
あなたのお名前を拾えないのは無常のしあわせ
ここに活字で載ったら人生の最期の墓場
栄誉も財産も権力もあらゆる娑婆の一切が
なんのうしろ楯として権威がありましょうか
あなたはまだ健在でこの町のどこかに生きていられると
自慰している。

――四四・一・一五――

明治の人

自分もその人の年齢をうわまわる馬齢を加えてきたせい
　であるかも知れない
別れてから四十年ちかく　かつて想い出したこともなか
　ったその人の起居動作が
きのう別れた人のように瞼に浮んできてならない
奇蹟でも起っていない限りこの世に
生存されていない年月の距たりが
いまころなぜ自分の脳裡に去来するのであろうか
Sといって退役の海軍少佐であった
日本海戦には旗艦三笠に乗っていたと
言葉すくなく語られたこともあった
その人はいつもうつむき加減に事務所の横の

ポプラの下を自分の足音をたしかめるようにしずかに散
　策されていた
郵送されてきたハトロン封筒をこくめいに裏返しては
書類の下書にされ行書の万年筆の跡が規律正しかった
少年であった自分がようやく世間のことに目が開かれ
詩など作るようになった青春のあけぼの
用紙の足りなかった貴重な頃とてまねるようにハトロン
　封筒の
糊をはがしては詩や短歌の下書きをしたものである
商売のためとはいいながらいまどんな用紙でも書きつく
　せないほど
自分の傍らにうずたかく積まれているが
その紙幅を埋めつくす何ものかが自分から遠のいていっ
　たこの頃
その明治の人を回想のなかに求めるのはなぜであろうか。

――四四・五・二五――

愛情

粗末な柄の着ふるした蒲団であったが
打ち直した綿を妻が根気にうずたかく積みかさねて仕上げ
糊のきいた白い敷蒲団や掛蒲団を
秋の日の一日を太陽のもとによく乾しあげ
その中にくるまると身体が落ちこんでしまう
太陽の柔らかい熱がほんのりと漂っていて
きなぐさい枯草の匂いが幼年の日に甘えた
母の懐ろに似てじんと胸に迫ってくる
結婚して三十五年　孫が四人にふえて老いかけた二人がいまさら言葉を正してわざとらしく語っても処置がない

言葉にならない念いが互いの胸のなかを通じあっていよう

仕事が終ると午前二時にもなろうとする
睡魔が訪ずれるほんの少しの間
枕もとの電気スタンドの灯りに気を遣って
頁を繰る音もためらいがちに
詩集などを読むまどろむまでの十五分ほど
私がまったく私に戻り私になりきるひととき
改めて胸にゆき来する言葉にならない数行を反すうしている。

――四四・一〇――

晩菊

畑の隅に手いれもしない捨て菊の茎のまのびた群生が
くる年ごと同じ位置に黙々と生きつづけている
まろく固い蕾をつけたのを見たのは九月の終りであった
すでに高い山脈の肌を厳しく初霜がおりたことをニュー
　スが知らせ
秋がはやばやと山の背をくだることを
ながい生きる智慧で体得しているわたくしは
若しかすると花の開くのをみせないでこのまま
緑の葉は黄色を帯び茎は枯れさいなまれて
襲いくる暴力の白い圧迫に拉がれてしまうのではないか
と

還暦をまぢかく控えた自分の境涯に似て
人間の言葉が理解されるものならひとこと
力づけてやりたい焦躁にかられていた

仕事に没入する日々が日課のようにつづいて
畑の隅の菊のことはいつか念頭から消えていたが
十一月もなかば過ぎて今年もまた世間の人たちが
その年に励んできた業蹟を世に展示する一つの区切りの
　季節に——
畑に捨てられて誰も顧みない菊の傍らに寄っていった
あ　そこにみたものは不思議と晩い秋の耀く日を浴びて
小粒ながら精いっぱい絢爛と咲き香っている白い菊の一
　群れであった。

——四四・一〇——

孫を抱いて

抱きあげると日ごとふっくらと尻のあたりに
円(まる)みを帯び体重の増してきたのが腕に感じられる
白い鰯雲が澄んだ空にしばらく動かず
珍らしく赤蜻蛉が一つ羽根を軽く空に舞っている
いちずにこの血のつながりの尊く愛(かな)しく
母乳の匂いが鼈甲(べっこう)いろの羊羹の肌のような頬のあたりに
　ただよい
柔らかくなめらかに光っている

祖父(じじい)としてのよい想い出だけを残しておきたい
もっと身ぢかで祖父のこころのなかに棲んでいる幼ない

愛するお前たち
順序ある序列にしたがうと黒い非情なるものが
一番早く私をどこかへつれていってしまう
絶対に逃げかくれきれることのできないものが人間に襲
　ってくる時
広い世間の人たちに悪しざまに批難されて生きてきたと
　しても
お前たちと血のわけた孫たちの一人ひとりに
品(ひん)のよかった祖父としていつまでも生きつづけていきた
い。

――四四・一〇・一四――

柿の木

ふた本の柿の樹は実を稔らせ朱を増し陽にあたりつやめ
　いてきた
この樹を植えた人は暗い黄泉路のかなたに旅だたれもは
　やこの世に在らせられない
衆望を担って飛騨から初めて代議士となった政治家であ
　った
多くの家作と山や田をもった昔からの豪家でもあった
漢詩人でもあって幾編かの詩稿を託された古い文庫のな
　かに見たこともあった
あとを葬う血縁のものは絶え母屋も人手に渡ってしまい
広い庭の古りた樹木や苔むした石は往昔を語っている

この柿を植えた人は鬼籍にはいりこの世には在らせられ
　ない
生きていられるとき親しく声咳に接したこともなかった
柿の花が咲くのもたわわに稔って垂れた実も味あわず
でも柿の木はなにかの意思にすくすくと伸びて弛むほど
　実を稔らせた
いま孫を抱いてその下に佇って或る一人の
歩いてゆき歩いて去った生涯について考えてみる。

――四四・一〇・一五――

机そして本箱

四十年もまえに従兄(いとこ)の大工が
栗の木で作ってくれた頑丈な机と本箱――
紅がらをぬり種油で磨いた民芸ふうな机と本箱を
屋根うらの自分のせまい室において眺めた
まずしかった少年の日の満ちたりた感激を
いまも昨日のことのようにおもいだす

長男に次男　それに二人の娘たちが
つぎつぎと譲り継ぎては父の手垢のついた
この机のうえで書籍を披げ知識を身につけていった
親と子どもたちが無言のうちに通いあうものがあった

予約して書店から購われた美術や文学全集など
私の手のとどかなかった垂涎の美麗な装釘の書籍が
すぐに本箱に溢れ未練気もなく子供たちは
新しい似あいそうな書棚に移していった
時の経過は素直に子どもたちを成人させてゆき
羽根をひろげて新しい生活へ巣だっていった
残された蜂のあき巣のように本箱が古色ないろあいで
もぬけの殻になった室にぽつんとおかれた
小刀の創やインキのにじんだ机とともに
あけわたされた四畳半の室にふたたび旧い主人のもとに
　還ってき
わずかに昔の記憶の書籍がそのなかに蔵われた――
残された生涯の余白がそこにまちもうけている。

――四六・九・一五――

秋夜抄

ながいはるかな旅路の果てを戻ってきて憩むように
夜具のなかに一日の疲れた身体を横たえる
枕もとの灯りを消すと十七日ころの月の光が淡く
書架に並んだ書籍の背をほのかに浮ばせ
贈ってくだされた労作の著者たちの私語がきびしく
自分への怠惰を責められるのが恐しい
その無言の叱咤の言葉もいつか庭で啼いている蟋蟀の声
　に混声されてゆく

生き継がれてこの秋、去年と同じ歌をうたう不可思議な
虫たちの生命のたくましい生きかた——

じっと一日　反省もなく追い廻されて
何のためにこうも働らかねばならない人間の愛(かな)しい宿業
　を——
生き難い世相に処してゆく才能のない自分への愛憎を——
　——
煩わしさもいまは考えず蟋蟀の歌の音をききき
暫らくのあいだ私への想い返しを素直に噛みしめて温め
　ていたいと思う。

——四八・九・一五——

春愁

硝子戸をほんのりと明るく城山の上に月が登ってきたの
　である
その光りをうけて春慶の書棚は妖しく底光りをし
横になり寝ている眼に金色の背文字が判読できてくる

今夜も妻が根気よく階下で
時計のぜんまいをぐうつらぐうつらと捲いていると錯覚
　したのは
啼きそめて呂律のおさない蛙たちの
窓の下の流れでの生への合唱であった

この頃目を覚すとしばらく寝つきがわるくて
行くすえのことなどを繰返して考えている
九歳の秋に父を失った日から不幸とともに棲み
自分の体内に空洞が徐々と拡がってきた
切開手術を施しても癒らない患部が大きい口をあけ
真紅な肉塊が深く患部を見せている

月の光りが家のなかをますます明るくし
臥床の布団の襟に顔をうずめて春愁の夜は
蛙たちの唄声を聞いていた。

――昭和二五年作――

好日詩抄

秋の一日　嫁いでいる娘たちが言い合せたように訪ずれ
　てきた
ふたりはそれぞれ女の児を負ぶって自信のある倖せな嫁
　御となって——
華やいだ明るさで屈託なく親に甘え娘の日の郷愁をとり
　かえすと
晴ればれしい肢態にまで立居がはずみ帰っていった
老いかけた私たちの肩に再び孤独がさっとながれるが
遠くにいる孫を抱けた今日の一日が
恵まれた日だったと心のなかに銘記しよう
彩づいてきた楓や柿の紅葉が夜目にもそれと

はっきり風にほのかに揺れてわかり
外灯に照らされて佇っている不安な貌に
車は未練気もなく速力を増し尾灯の赤い信号を
三回点滅させ街の角を曲って消えた
私たちがまだ楓のある門の傍らにたって見送っているの
　を意識して——
婿はちゃんと別れのサインを忘れられない
この門の印しの楓はかつて娘たちが幼かった頃
山王の杜から採ってきて移した若木だったが
いま見上げる高さに葉は彩づいて秋の訪ずれたことを知
　らせてくれる。

——四七・一〇・二三——

山峡詩譜

——ふり積った雪への郷愁——

雪原を歩いてきて益田川の縁までおりた
かつて画聖大観が高山の画友を尋ねたとき
人力車に揺れながらこの辺りを通り過ぎ
後日その自然の雄大さを大絵巻き「生々流転」の
傑作となった素材の地になったとも推定される
長淀（ながとろ）と呼ばれる部落は森閑として
その名のごとく碧い神秘な淀をなしている
屹立する対岸の山々は薄墨にぼやけて
南画風な景色のただずまいに沈んでいる

戦いの終る夏の初め半どしここに疎開し
仮住居して素朴なる村びとの人情のなかに溺れ
六人の一家が生命を損われずに護られた
棲みついた想い出の農家はいま人も絶え
壊されたあとは畑にかわって雪が白々と積り
私の記憶を断絶に追いやるが
ここの半歳の生活はぎりぎりの生への闘いであった
黙ってそっとこの土地を訪ずれた抒情は
まぶしい雪の織りなす幻覚であろうか。

——五一・一・一——

お正月

――少年の日の回想のなかで――

父のたく焚き初めの豆殻のはぜる音で目がさめた
父は元旦のこの晨　誰よりも一ばん早く起きて
囲炉裏にこの年の新しい聖なる火を創った
朝はまだ旧い年のつづきで暁は遠く
宮詣りする木履の音が凍みる雪の路につづいている
もうもうと煙ったい新しい年がほんとうに我が家を訪ず
　れた
過去となった半世紀も前の元旦の風習は
故里ではもう一篇の記録となっていよう
囲炉裏で榾を焚く家などはもうどこにもすたれてなかろう

立って歩くこともできない屋根うらの
煤けた室の　しかし一城の主であった少年の私が
豆ランプの光りのなかで先刻から目を覚し
目からは涙を流しながら煙ったい豆殻のはぜる
凍みる寒さを肌に感じていた
新しい年の足音をこころに染みこませ
希みにふくらむ胸の高鳴りは
少年にのみ授かった神の恩寵であった
自在鉤（かぎ）に大きい鍋を吊して
丸餅を焼いている父の姿はまだ若く
温かいその芳香ははっきりと新しい年に現実とつながっ
　てゆく
餅の大好きな父がお雑煮の一升搗きを平気に食べ込むと
その日は昼も夜も何一つたべずに寝ているお正月であった。

世襲のように

幼ない孫の男の子の立ち居や
羞らいのまじる語らいのなかに
自分の小さかった日の片鱗が
驚くほど似かよって顕れる時がある
胆っ玉が小さくて涙もろく
やっぱし自分の体内に脈うって流れる
どこか頼りなく融通のきかない
学業の科目までが不得手なものを承け継ぎ
血の繋がりの濃く幾代もつづく世襲の黒い血液
遺伝のように連綿といきづいている厳しい掟なのだろう
か

私が自分の子に托した夢は大きかったのだが——
他人に一ひらの不快も与えたこともなく
煩らわしいと思われるようなことをしたこともなく
ひたすら夜昼を営々孜々として働いてきた
報われることの少ない日本の貧しい
下じもの庶民の典型である私ら三代の同胞(はらから)
不合理な世の生きかたに反撥する知恵もなくて——

——五〇・一・一二——

生命いとしく

千年も二千年もの前にすでに地の果ての
光芒のかなたに消えていった人達がある
百年も二百年ものあとの世にも
人類はしのぎをけずり生きつぎ生きのびてゆくであろう
千年のあとの世に生れてくる私ではない
いまひとたびかけ替えのない生命が自分に与えられ
限られた生をこの現身（うつしみ）にしっかとうけとめている
温くたぎる血しおが肉体をかけ巡り　人の世を冷静に考
　えている
自分を問いつめてゆき　質してゆく時だけが
自分が現に生きていることに繋っている

朱い落日が柿の紅葉をひときわ華麗に彩り
その下に佇って逝く秋と　生の愛（いと）おしさを
悔やみのない心情で見惚れている。

――四五・一〇・二五――

録音記二題

(一)

ＮＨＫのその放送は半どし前に逝った母の想い出を
「母の日」にちなんで放送局の次長さんとの対談であっ
た
二男がラジオから流れる私の言葉をとらえ
朝はやく起き準備して録音しテープに収めてくれた
その二男はいま遠くに転勤して録音器も手許にない
もう七年も過ぎた昔の私の声はテープのなかで永い眠り
についている
母を想う詩の二編ばかりを私は下手でぎこちない会話の
間に朗読した。

(二)

母が亡くなる三年前くらい高山に遊びにきたとき
幸いに二男が録音器をもってきていたので
若い日母が信州へ糸ひきにいった
雪の野麦峠を越した道中の苦しかった話や
船津めれたや越中おはら節などを
巧みに話題を誘ってテープに収めることができた
母は民謡や踊りが上手で故里の神社の境内などでよく踊
った
細い低い声ではあったが少し酒でも入ると
陶然と楽しそうに正調なものを伝承していた
私には貴重なこの録音テープも保存しているが
永いこと母の声音を聴いてはいない。

高山詩抄

——公園の道にて——

誰かそこにきて私を待っている錯覚におそわれ
追いやるようなものが体内に充ちて来て
理屈なく仕事のつづきを抛げうたせると
夕暮れの山王峠を登り左へ道を曲らせた
呼吸も静かに心臓の鼓動も平静に戻ったことが
落ちついてきた足どりに自覚された
鋲をうった靴の足音があたりの静けさを破ると驚き
あとを振り返るが誰も従いてくる気配がない
もう三十年もまえ、夕暮れのこの道を歩いた愕きが
自分というもうひとりの私に話しかける

我が家から歩いて十五分くらい、ここは自分の庭さきほ
どの距離であるのに
不思議とここへくることを拒否するものは何ものの仕業
であるのか
人に会うのに途中から断念して踵を返した少年の日のよ
うに
聖地を犯すに似た冒瀆がここに立たせることをいつとな
く拒んでいた
憧憬のなかに山脈(やま)を胸に想い画けば満たされていた

足をとめると東につらなった夕映えの山脈が
若い日のままに悠遠の山容をしっかと鎮めている
雪を八合目くらいまで覆った乗鞍の薄いばら色のなだら
かな稜線
その前に奥穂や前穂の厳しく白い胸板

槍も笠もいまは人煙を寄せつけない孤独の姿で
誰のために崇高に沈んでゆく陽を胸にうけ止めているの
　であろう
山脈の頂きが今日さいごの太陽の光に映えて
その照り返しがにぶい私の影をつくっている
声もだせず足をとめて久しい年月胸底に想いつづけた公
　園の道を歩いている。

冀願

サルビヤや鶏頭の朱い花が沈んだ色で
陽の落ちた病院の庭に同じ姿勢で幾日も咲きつづけ
父母の愛の瞳より遠ざかった養護学級の子どもたちの
愁いの貌たちを見あげていた——
窓辺に近づくとすぐさとって窓により
二重になった硝子戸と網戸をあけようとする
それをとどめ背を伸ばし網戸に頭をつけると
笑顔をつくって近づけてくる
夕ぐれのこの時間は子どもたちに
魔ものに魅せられたように人を恋うる時である
今日は面会日ではない会っていけない日である

盲愛の所業に自分でも羞ずかしくなる

このごろ夜のながくなって
更けた寝床のなかで目がさめると
もう一年の半ばも入院し勉強している
こどものことが狂おしいまで
可哀くしばらく眼がさえて考える
祖父(じじ)のいのちが縮まってもいい
成さねばならない大方のことが片づいた
迅(はや)くまっしぐらに与えられた時間が
過ぎさってゆくがいい惜しい気持はない
残りすくない生とその将来が
自分なりに予測できる老齢の域に達してきた
終焉の時がいつ襲ってきても悔むことはない
生がいつ果ててもその償ないに

子どもの病いが癒らねば意味がない
三年でも五年でも私のいのちが短かくなっても
健やかな日々がはやく訪れ
喜々として鞄を背おい赤まんまの咲く道を
登校できる日が還ってくるのなら
少しも懼れることはない。

――五一・九・二〇――

予告

北むきのうす暗く
二階の四畳半のせまい部屋
書斉とも寝室ともわからない
ゆうべの敷布団がたたまれもせず
枕も汗っぽく飛んでいる書生のような部屋に
書きほぐした原稿用紙や
書籍やかびの生えた古新聞の切抜きなどが
乱雑に散らばり足の踏みばもない
それでも私には孤独の城砦である

泥沼に両脚をつっこみ

のっぴきならぬ困惑と焦躁のあけくれ
生活のおりのような無精の垢が
出口のない袋小路に追いこまれ身についてしまった
私はながいこと無明の谷に行きくれ
屑ものの堆積のなかで呻吟しなければならなかった

嵐のような奇蹟が私のなかに忽然と起き
ふっと予告もなく想いを新たにし
私は生れかわるように思考をとり戻し
乱雑に拡げられた紙類の紙魚(しみ)くさく
散りぢりになった部屋に坐ると
生れかわった優等生のように
神がかりに憑かれた神妙さに自分をはげまし
机のひきだしから書棚まで整理しかける
全能なる神かまたは将来を予見する大きな力が

明日は　明後日は私の生命に
異変を迎えることを知っていて
いま身辺をこんなに清潔にさせるのでは　と
翔ぶ鳥の跡を濁さぬように
七十年にちかいぶざまな生きかたを
せめて死に対うときは美しいものにしたかった
絶対な次元の世界を予見できる能力者が
私をこんなに追い廻しているのではないか　と。

――五一・九・一八――

無題

いまに始ったことでなく昔もそうであったが
過去を語ることのほうが多かった
書くことの大部分は過ぎさった生活の
平凡な愚痴まじりの老人のくり言のいきつ　戻りつ
読むひとの　聴くひとの身になって考えたこともなく
私小説のようにあきもせずぐるぐると
汚れた掌で膚を撫でまわすように
自分ですら愛想も根もつき果てた
一度だって眦をいからして若い未来に
夢を托し自分を可能な原野に立たせ
華やかなゆく末に希みをはらませた一時期が――

青年の逞しい覇業を心に画いたことなどあったであろう
か
交わってきた友だちの多くは
みな年長の先輩が占め　何かそこから樹液を摂ってはき
たが——
私の「詩」を読んでくれる数すくない人も
若い人には魅了する何ものもなく
車輪をあとへ逆に廻すような進歩もない
無用の言辞にひとり溺れていた
生きてきた時代が悪かったとばかりと言えない
不幸な戦乱の歳月がいつも
生活を不安と困憊におとしいれた
家族の多くを餓死の寸前に追いこんでも
私は狭い自分の身辺をあぐみもせず
書くよりほかに能がなかった

明け易い夏の夜の或は晨の眼覚めの床のなかで
転々と反側しながら「詩」にもならない言葉を
遺書のように綴っては書き　消しては書いている。
——五二・六・二〇——

夜の記録

それを言うまい――と　いっても既に話しかけているで
　はないか……
しまい風呂をでた夜の十時すぎ
窓のそとでは秋を奏でる虫の調べでさえ
すこし声をおとして憩らいの園に
かえる時だというのに
ふたたびインキの染った作業衣を身にまとい
まだ残っている仕事場に戻らねばならない
せめてさっぱりしたこの区切りで
自分の時間をもちたいと願うのだが――
せまい室の古い卓の前に坐って

虐げられた者への愛情のみちた物語りを書いた
むかし読んだフランスの作家
まずしかったルイ・フイリップのように
誰にもおかされないせまい四畳半に戻って
寝るまえの一時間ほどの自由な思索が
今日も生きえたと証しされるのだと思うが
あてもないまたは生活への何のプラスにならない
原稿用紙への桝目を苦吟して埋めるより
ふたたび油のついた仕事着を疲れた身体につけ
まだ息子の仕事をしている傍らで
汚れた印刷機のローラーや機械を掃除をし
青色申告の伝票を過誤なく整理しなければならない
自分に課せられた仕事の負担が
少年の日の仕事に夢中した日が還ったように
気分をとり直して暗い仕事場へ追うのである。

慕父抄

いま思うと父は癌で亡くなったのだ
金沢の大学病院へ二度もいって手術した
頬っぺたが瘤とり爺さんの瘤みたいに
切っても除いても瘤が執念に盛りあがってきた
大正の中ごろ汽車はまだ笹津までしか通っておらず
それも軽便鉄道で鈍行に輪をかけたのろさであった
飛騨からの病人の旅はとうてい筆舌に表わせない
金沢のみやげに玩具の空気銃をもらった
ピカピカ光った金モールの軍帽もあったが
これは弟への土産であったか知れない
第一次世界大戦がおわったあと
世のなかも政治も軍人に幅をきかされ

少しずつ方向を誤らせ狂げられてゆき
大戦の好景気の余波も昔語りに山の町は沈んでいった頃だ

たった一枚あった父の記念写真が
私が産れる前の明治の終りに
消防組の出初式に撮ったもので
他人のように澄しこんでいる姿は
真実の父とは思えない
どんな文字を書いたのか
一片の手蹟も残っていない
八歳の秋に三十五歳で亡くなり
もう父の倍にちかい年月を生きてきた
歳月が経過するにつれ
私の記憶はぼやけてゆくばかり
年齢が健忘症にますます追いうちをかけてゆく。

――五三・五・一五――

晨の記

養父の焚く豆がらのはぜる音と
餅を焼く香ばしい匂いが室まで襲ってきて
その煙ったさと懐しい匂いに眼を覚した
立って歩くことも困難な二階の
屋根うらの室から這って梯子を下り
少し猫背になった炉端の養父の傍らにきた
養父は除夜の埋れ火を新しく熾んに燃やし
大きい鉄鍋に丸餅を焼いていた
正月三ヶ日はきまって丸餅を焼く習慣になっていた
餅が無類の大好物で一うす搗きを
雑煮でおいしく食べこむと

元旦の昼も夕食も何もたべず
旧い年の寝不足をとりかえすように
一日じゅう牛のように眠りこけていた
「一太郎(かずたろう)よ、お前、儂のぶんも
宮様を詣ってきておくれ
そこに馬上提灯(ばしょうちょうちん)があるで、火を点してな
知った人にあってもけっして
誰にも話しかけてはだちかんぞ
神さまに参るまではなァ……」
外はしんしんとした雪の降る凍みた夜空で
宮詣る人たちの木履の音がきくきくと鳴っていた。

祭礼の夜

参道の坂を酔った若者に担がれた大御輿が
御社の前で粛然とおろされると
やがて神楽や祝詞が奏上され神移しの儀式がはじまった
急霰が二十五山から襲うように笛や太鼓　鉦の音が
ドンドン・ヒュウヒュウ・カンカンと
阿修羅の響きに境内を震わせ高い山々にこだました
そこには確かに神々が実在し郷土の五穀豊穣を祈念さ
　れての巡幸であった
真のまっ暗な闇が境内を圧したと思ったが
この御社の下の花街からの唄声やさんざめきが
私語するように私の脳裡をくすぐり通り過ぎた

痍(きず)つきやすい十代の祭礼の夜の神秘と不可思議さが
郷土を離れて半世紀近く閲した日月にも色あせず
昨日のように鮮明に去来している。

故郷詩譜(一)

雪がつもっている城址へのぼる坂道の半ばに
養父と母の墓碑がひっそりと建っている
ま上に神岡城がのしかかるように偉容をみせ
鎌倉時代後期この地におちてきたと伝説の
江馬氏の重臣として住みつき六百年を経
純粋にひだびとである長い風雪の
歴史と誇りが私の体内に流れている
街の眺めが鳥瞰される明媚の地に
祖(おや)たちの息吹きが伝わり安らかに眠っている
すべる雪の坂道を一歩一歩踏みしめるように登る
靴で雪をこざいて踏み固め

ひとり通れる道をあけて墓前につき
掌で台石の雪を払いのけると
花のたしない時期の淋しい花々を供えた
ときどきふる里に帰ると時間をつくって
墓に詣でることにしている
いまはこれ以上の切ない想いをはける場所が他にない
花や水や線香などがなくても
ここまで歩いて登る坂への時間が私の心を和(なご)ませる。

故郷哀慕

若き日　故里を出たことは別に悔いることではない
山のなかの狭い視野から飛びだしていった勇気を
人知れずこころに誇ったことさえあった
幼なくから馴染みふかく親しんできた
心ゆるせる多くの友と離れ
異邦のような見知らぬ土地に棲みついて
いま命のはての終いの日を迎えようとしている
再び還らない歳月の集約が無為に思われてならない
大穹を翔んで古巣に帰ってゆく候鳥に似て
老いを迎えて故里への回帰するこの心情は
なんと自分に納得を与えていいのだろう

故里はいつでも幾ばくの路銀で
すぐ帰れる至近の距離にあるのだが
昔を語った多くの知友はそこに少なくなり
人の世とともに推移に鞭うち変りて
造成された狭い土地は子供の日の夢をこわした
見知らぬ土地を訪ずれる旅行者であり
胸に描きつづけた故里の山河にほど遠く
昔を語る人はそこに少なくなった。

――四八・一一・三――

故里の歌

眼が醒めているのだがここはどこだと劃然とした判断が
　できかねて
夢と現つの境いをさまよいふかぶかと身体を沈ませた褥
　に
甘えたように物憂く臥せっていると
ゆうべからの懐しい故郷の友情が蘇ってくる
鮭属が河床を遡上して産卵の古巣に戻ってくるように
年に一度の同窓のものが集り友情を温めあい
生きている証しを自らの心に触れあわせて
十代の少年に若返らせ気焔をあげさせた
生き残っている幸せを――或は考えようでまだ生きてい

る不幸を
この生き難い世間の酷しい桎梏に反撥して集ってきた
暁の庭はまだほの暗く生ま暖かい風が雨にかわったらし
　く
雨の音が芽ぶかない樹々の上に降っているようだ
二度ばかりその音に仮寝の睡眠がやぶれたのを記憶して
　いる
雪融けのながい谿谷の水量をあつめ高原川の瀬音が耳朶
　に響いてくる
ふしだらで吾が家で味わえない豪華なただずまいのなか
　で
自分に与えられた束の間に過ぎてゆく僭上な位置に身を
　ゆだねている
その時である――

川向うの高台の禅寺から朝六つの鐘の音が
一撞き二た撞き余韻を嫋々とのこして山峡の町の上に消
えてゆく
心のなかまで洗われる思いでその音の数を追っていた。

――飛騨神岡町・向月荘にて――
――四九・四・二八――

朝

高原川の急湍に沿った雪の路を
割石（わりし）という在所の養父の親戚の家に向っていた
何の使いであったか今は想いだせない
朝早く家を出た――養父の手編みずんべ靴をはいて
木地屋という部落を過ぎると
旧道は歩危（ほき）のつづきでためらって歩いた
岩蔭から雉子が羽撃き雪を散らして飛びびっくりさせた
誰か前に通った大股の歩幅に飛ぶように歩いた
十三歳ころであったろうか
凍みた硬い雪路で新しいわら靴が
キクッ　キクッと鳴って心地よかった
今はその辺り神岡線が通っている。

故郷詩譜(二)

東西に走った町並がすぐ尽きると
峻しい山が立ちはだかり圧してくる
故郷の町は川に沿い猫額の地に
犇めくように家が競いたって
いたるところ石垣が築かれ家をささえている
神岡という地名がどこに起因して呼び名されたのか
なだらかに起伏した丘らしい段丘はなかった
ただここだけが――城したの神岡鉱山への細い道が
幼かった日の丘への心象が残っている
そこからみる石を屋根においた町の眺めと
高原川の水かさの豊かで早かった瀬々の音

白い土蔵の流れに投影した風物が
六十有余年もたった今も網膜に焼きついている
片ことのわかりかけた幼ない日であった
父は鉱山の製錬の焙焼炉で稼いでいて
夕ぐれその道へ迎いにいった――若い母に手をひかれて
短衣(みじか)に股引き草鞋をはきねこだを背おい
鉱滓の匂いを染ませて帰ってくる父に
体当りに抱きついていた。

野麦峠

母が娘の日　船津からたった糸ひき工女の群れに　古川　国府　高山の町や村の娘たちが加わり　峠にかかる頃は　一団体だけでも一〇〇〇人余りの大集団となった日露戦役の終ったすぐ後の　資本主義社会への出発と外貨のかっとくに　かよわい娘たちの働きが資本家を狂奔させた。

モンペにはぜのついた黒い脚袢　または尻端おった赤いお腰に紐でしばった草履ばき　凍みついた雪は音をたてて鳴った　おにぎりをけさがけにしょって隊列がつづく　雪のふりしきる峠は高い壁となって聳えている　大勢の人の力で先登の難儀のお蔭で登れるのだ　時に一時

間も雪を踏み固めて立ち往生する　母は酒でも少しはいった時　娘の日の苦しかった日を語ってくれた。

私は昭和四十四年の七月　深山鶯の声に送られ　カッコウの鳴きごえに迎えられてこの峠の旧道　母の登った道を歩いた　母の歩いた同じ路でも季節はまるで事情を異にしていた。

その母は生涯を　糸をひき　機を織り　料理屋の下働きなどして六人の子供を育てあげた　貧しい典型的な愛(かな)しい女であった　昭和四十二年の十二月三十一日の押し迫った夜の八時　枯木が倒れるように八十歳の生涯を閉じたのであった。

――五二・一二・三〇――

海を渡って

私だち日本の祖先がはるばる
大木をくりぬいだ丸木舟を櫂でこぎ
東へ　東へと籾や農具を積みこみ
一つの島につくとその島に住みつき
その子や孫たちが親の遺志をついで
再び同族を宿命のように移動させ
日出ずる東の涯の細ながい列島にたどりついた
日本の祖たちとそのなかの鰐氏の一族
翠りなす豊穣な弓形の列島は
ワイロに汚染されぬ蓬萊の宝島であった

——いま私の乗ったエール・フランス機は
大阪空港を離陸しぐんぐん上昇していた
高度八〇〇〇メートル　秒速五〇メートル
数世紀に亘って海洋を渡ってきた
数千キロメートルの距離を七時間ほどにちぢめ
タイランド・バンコックに向って翔んでいる——

ジェット機は停止している感触で
碧い穹と青い海上を浮揚し飛行している
はるか下方に眺められる島は
台湾の南辺りであろうか
褐色の大きい島が忽然と
高度をさげた視界に入ってき
不思議と海の実感を与えた。

海辺で

子供と一緒に旅に出かけられることなど
思ってみない幸せの訪ずれであった
くる日も去る日も仕事に追われ
親子で旅に出られることなど生涯恵まれない　と

乗合自動車の窓から一日じゅう
能登の碧い海が飛びこんできた
久しぶりにみる浪荒い日本海の海は
新しい力が甦ってくる感じだった
潮をふくんだ海の匂いに
胃のなかまで洗われるようであった

海を渡ってこの国にきた遙か遠い祖(おや)たちの
気概と勇気が沛然と体内に流れ
眠っていたものを覚ましたのかも知れない
子供はカメラを提げ自信あるポーズで
旅なれた青年になってこの短かい旅にとけこみ
波頭が白く砕ける千里浜の砂原で
海を背景にカメラに収めてくれた
子供もまた父との行楽の記録を
こよない想い出の頁に記するのであろうか――
浮きうきと心が幸せにふるえ
大きい肩越しに荒い海に見惚れていた。

――五一・一二・九――

私の植物誌 (一) 梨

——大和路は田圃をひろみ夕あかるしいつまでも
白き梨の花かも——　木下利玄

気づいた時には三年くらい経った梨の木が畑の隅に生えていた。実生から生えたのであろうふた本の柔らかい嫩葉が寄りそうように春の日になびいていた。去年も今年も同じ場所に生きつづけ、幹も樹木らしく、自分の背よりも高く育ってきたが、彼等は頑固に花の咲くことを拒否して、蕾をつけることを忘れ、いっこうに花を咲かせず、実も稔らせない。

そうだ、或る年の秋の日の午後のこと、直ぐ傍らの棗の実が琥珀色に一つぶ一つぶ変ってゆき、実りの秋を誇

るように耀いている下で、妻は、この出来のわるい梨の樹を見上げて、突然、さも、癪にさわったように「このよたな木を伐ってしまわまいかいなア、いつになったら実がなるんじゃろう、でかくだけ一人まえになって、日蔭をつくるだけじゃもの……。」と、憎くたらしい気にいう、妻のそういう気持も理解できないことはないが、「来年の春まで伐り捨てるのを待ってやらまいか。来年はきっと花をつけるに。」と、私のとりなしで梨の命が伸び、寒い冬にはいっていった。細い毛根も太い幹も凍み氷らせる烈しい飛騨の寒い冬がいつか過ぎて、万物のうえに回春の恵みの温かい春がやってきた。黒い大地が陽炎にもえていていのちあるものがみんな浮きうきと穹にむかって伸びようとしている。

畑の隅のふたもとの梨の木にも平等な春が訪ずれ、その葉蔭に白い花が三輪、処女花とも言うのか気高い花を、

人の力では及びもつかない作品となって羞らうように咲かせていた。

――四五・一〇・一〇――

私の植物誌 (二) いちい

いちゐ（笏ニ作ル料トシテ名アルガ故ニ一位ニ寄セテ名ヅクトゾ）樹ノ名、高サ丈余ニ及ブ、葉ハもみ又ハかやノ如ク柔ニシテ茂ル、実ハ豆ノ如ク熟スレバ紅ニシテ甘シ、材甚ダ好ク、木理、木南香ノ如シ、笏ニ作ル、飛騨ノ位山ノ材、名アリ。一名アララギ、オンコ、オッコ。水松、びゃくだんのき、又ハきゃらぼくト称スル樹モ此類ナリ。

――大槻文彦「大言海」――

もう拾余年も前になるであろうか、晩い夏も過ぎようとする朝の一と刻、爽涼の風が樹々の下を通りぬけていった記憶が新しい。円空さまの彫らしゃった鉈ばつりの不動明王のように陽にやけた厳めしい顔の若い庭師は鋏を軽く律動的な音をたて忙しく手を動かしていた。二間の梯子を斜めに傾けてたて、太い麻縄で両方から支えその梯子の頂きちかくに乗っかり軽業師の身を繰る所作に

似て鼻唄をうたいながら剪定に忙しい。「ここんじゅうで、この樹は一ばん値打のある木やでなー　もう百年はたっておらずも。これを植えられた飛騨から初めて代議士になられたNの旦那も、いま生きてござったら、さぞ喜ばれるやろうに――。」その下にたって徐々と樹の姿が整えられてゆくのを眺めている私に話しかけた。

その名前を識っていたが、生前面識する機会がなかったN氏が心をこめて植えられた一位の木は樹勢もよく濃い緑の艶めいた葉を年ごとに拡げて、自分の四人の子供が育つ姿にも似かよい生々と繁茂し、庭師のいった言葉のように数少ない庭の樹木のうちでは不似合に立派で逞しく、赤銅色の樹肌が緑の葉と対照よく落着いたただずまいをみせていた。永い年づきこの樹は我が家の守護神とも思い一つの行旅を象徴すると思うほど信仰のように

啓示を私なりにうけていた。自分の四人の子供たちが平和に生をうけ継ぎてゆく無言の助言者でもあると思ったのに――

小さい仕事場でも時代の要請に従わねばならない。孔版印刷からタイプ、オフセット印刷と切り替えられて、いつからか製版の廃液がいちゐの木の根元のそばを流れるのも気づかずにいた。薬品が毛根から根元へと褐色の幹を浸し朽ちてゆくのに拍車をかけたのであろう。いま流行の言葉でいえば一つの公害なのだが、不注意にも私は気づかず自覚もしなかった。それから二年くらいたった夏の終るころ樹の枝々に例年のように朱い簪の玉のように実がまっかに稔った、緑の葉が隠れてしまうほどに枝が燃えあがり、全身で瞋恚の焔を燃やしつづけているとしか思えない。不吉な暗い閃めきが頭脳のなかを走り

去った、その炎（ほむら）の身を以って抗らういちゐの木は、もう力も尽きたと声をだして叫ばれないもどかしさを全身にこめて反抗し私に声をしぼって強く抗議を挑んでいるようにみえた。その秋が最期であった。葉は徐々と褐色に変りぱらぱらと落ちはじめ、朱い実も悲しい残骸をその下に落して晒らし、雪の降るころには裸の木になってたっていた。名を惜しむ人間のようにいやはてのその終（つ）いの日まで朱い実を粧って生きつづけたいちゐの木はまだ切り倒されず庭の隅にいまも裸身をたちつづけている。

——四六・一・一五——

私の植物誌　(三)　這い松

はひまつ（名）這松一偃松　松属ノ常緑樹。高山ニアリ灌木ニシテ、五葉松ニ似、高サ三、四尺ニ過ギズ、枝葉、繁密ニシテ、匍匐性アリ、地ニ這フコト数間、群生シテ数十百間に及ビ、這松帯ヲナス。五針葉ニシテ、花ハ紫紅ナリ。九、十月ノ頃、実ヲ結ビテ、卵形ノ松笠ヲツク。雷鳥、此ノ実ヲ食フ。千歳松。

——大槻文彦著「大言海」——

その人達とは短かい年月ではあったが、家族ぐるみ親戚より親しく交際してきた。心とこころ肌とはだが触れあうように、文句なく気のゆるしあえる人柄であった。俗に言う根性がよいというのか、不思議と寛い包容力に抱かれて、人見知りする悪い癖の自分にその人たちは円満な人間的なつながりで接してこられた。

遠く北陸の新発田市の出身ときいていたが、仕事の都

合で新しい任地に赴任されることになった。転居のさきは関東のK市であった。住宅の裏庭には巨きな松倉石が何個もいれられ、築山をつくり、松が植えられ、池を掘って大きい真鯉や緋鯉が何十匹となく泳いでいた。数奇をこらした庭園や新しく建てまされようやく完成した住家を残しての出発は随分こころが渋るようであった。建物や宅地の売却もみんな私に委託され、出発される時、一ばん愛玩されていた一鉢の這い松を記念に贈って下さった。鉢には緑の苔がながい年月のただずまいを語っており、ちょうど厳しい山岳の這い松地帯の山容を彷彿として浮ばせているようだ。這い松は枝ぶりよく習性のように臥龍が首をもたげて今も這いだそうと鉢の外へ斜めに伸びて、何十年の閲歴をしずかに語っているかにみえる。

小さい鉢のなかに巍然とゆるぎなく定着して大悟処を

得た緑の葉の不安もない生きかたの正しさは、きっと人間の愛情を拒否して生きた峻嶺の皚々とした万年雪の下に生きつづけ人智のはかり知れない、人間の浅はかな温情など及ばない非情な雰囲気のなかに生きてきた、或は愛すればこそ千尋の急峻な谷底へつき落すという親獅子の愛の仕打にも似て、その人は憐れ容赦もない厳しさでこの一本の這い松を子のように愛し育くまれてこられたのであろう。両手で貴重な品を捧げるようにもってこられたその人は、「暖かい処にもっていっても、この樹はだめになるでしょう、やはり飛騨においてゆくべきです。寒い極寒の飛騨においてこそ、この松は本望でしょう……。そしてあなたの傍に……。いつまでも眺めてやって下さい。」その人の瞳には私の想い過しか温かいものが宿っていることを感じて正視できなかった。辞退しても持って帰られるわけがなかろう、言葉にならない思いが

私の胸のなかを熱くかけ巡った。そうだ素直に有難く頂こう、ご好意に甘えよう、なによりの記念の心の篭った松！　這い松！　たいせつに育てて再び相いみる時には生長したこの松をおみせしよう。あなた達との短かい年月ではありましたが、ご交際の想い出をこの樹を通して新しく胸にたもちつづけましょう。玄関とよぶにはあまりに寂しい陋屋の古びた下駄棚の上にその鉢を据えると、にわかにあたりが深山幽谷の気配に自分をおき、折から寒い冬にはいった緑少ない土間は活気あふれたように、私を山岳の、かつて登った乗鞍岳の這い松地帯にいると錯覚をおぼえさせるのでした。

この詩が、この一篇の物語りがここで終止符をうたれるのなら、私はこの「這い松」について何ものも記述することがなかったのである――。というのは、私はどうしてこう融通のきかない、世事にうとい、浅はかで、頓

馬な自分に愛想もなにかもつきてしまった。誰にあやまり誰に詫びればよいのであろう。夕がた一本のおしきせを呑んだあと、徳利の底にわずか残しては松の鉢の根もとにそそぎ、牛乳を飲んだあとはまた少し残しては松の根かたにあけてやった。こうしたことが幾月かつづいて春が巡ってきたころ、万物の樹木の上に新しい柔らかい芽が吹きでてくるのに、這い松の緑は心なしか色に生気がなく、芽穂も立ってこない、愕然としてよく見れば衰頽は覆うべくもなく枯死寸前、気息奄々、すでに手の施しようもない枯死の間をさまよっているのであった。

いつか私は近くの母子寮の幼ない子供たちに強く生きるのを望んで一篇の詩編を作ったことがあった。過保護という奴は結局依頼心のつよい子供を育てて世の中に役立つものにはならん、と、理屈ではわかっていたがこの這い松の場合は終局誤った浅智恵の愛情で枯死に導いて

しまった。寒い零下二十度の庭の雪のなかに放り出しておけば、酒も牛乳も与えず厳しい愛の鞭でうつことによって、彼らは生き永らえる処を得たであろう。いま枯れてしまい葉の散りつくした死せる臥龍は東の山脈の故山に向って回帰してゆく日を喚んでいる。

——四六・——

私の植物誌 (四) 芙蓉花

——今朝の一つ咲きし芙蓉のあざやかさきのふの花は既にちりたり——

大悟法利雄

何ものにか追われるように、自分にすら対して顧みるいとまのない生活のつづく朝——
くる年も規律ある営みにその花期の、時日をたがえず今年も八月八日の朝
まず一ばん咲きの大輪の白い花瓣が咲きひらいてあたりを浄め
少し羞ずかしく娘御の袖で顔をかくしているように咲いた
年によって二日ほどの狂いがあろうか、秋のたつのを知らせてくれる

自分もほっと安堵の安らぎに似た溜息を反芻して
生きのびてこの花に対った自分の年齢を温める

いつからか理由をさがしても合点のわからない私から遠
のいていったひと——
或は私たちが信じあえない悲しい人間の「業」にでもと
りつかれて
疎遠の垣を知らぬうちに築いていったのかも知れないが
——
つぶらに稔りかけた紫紺の葡萄だなの下で
同じ職域に生きて糧をうる気安さで懇ろに語った言葉が
時日を隔ててあざやかに想い起こさせる
いとましようとする私の自転車の荷物台に
咲きおわった芙蓉の根を掘り茎を揃えてきり
細い葡萄の苗木とともに結えてくれた厚意が

じんと胸にこたえて必死に育てねばと良心に誓った

時が訪ずれれば花にその意志はなくても素直に開花の日
を約束し
人間の悲喜慷慨にかかわりなく、自分を精いっぱい生か
して粧う
気だかく咲きつづける白くうるわしい芙蓉の花
移りゆく人間のこころのはかなさ、うとましさ
自分のなかに徐々と忍びよってくる老いと
人を厭う心が花にはずかしくじっと眺めてはいられない。

——四六・九・二〇——

私の植物誌 (五) 宮城野萩

――咲けりとも知らずしあらば黙然もあらむこの秋萩を見つつもとな――

万葉集 二二九三

ホテルは丘の上にあった。そこに登ると山の街がよく俯瞰できていまは舗装された道を私が自転車で登るのにさほど苦痛ではない。東の方を臨むと高い日本アルプスの重畳とした岳々が指呼のうちに欲しいままにできた。

でもそこに登ることはめったにない、豪華なホテルと私は無縁でなんの関連もない。だがホテルの社長さんはいまわしい戦争の末期、かつて私を違った職場で傭ってくれたこともある町の実力者の一人であるが、五年に一ぺんくらいふらっと印刷の仕事を中元か歳暮のように与えてくれてこの坂路を登るのである。

八月の終りころの一日、錆びた自転車を押して少し背の曲ってきた私はその坂道を登った。ホテルのすぐ下の、そこは坦々としたやや降り勾配の道であったが、故もわからない甘い香ぐわしい匂いが漂っていて――初めは花の匂いともわからなかったが――私は立ち止って鼻孔をくんくんとめぐらし驚いて目を据えてよく見ると、何と頭上から辷り落ちかかり枝垂れた紫紅色の萩の花がいちめんにいま真盛りに咲きつづき、路下にも足もとを払うように咲いて、萩の花がこんなに素晴らしい香いを発散させることを初めて知った。私の身体に萩の精が宿って匂いが汗ばんだシャツの色を薄い紫色に染めかえたようであった。この花の咲いている短い時間との邂逅が大きい力の摂理に支配されていると有頂点の喜びにひたらせ花の生垣を通っていった。

そういえば仕事場の横の庭にも、もう二十年も昔、市の教育長でもあったY氏から贈られた宮城野萩が年ごとに株が殖えて花を咲かせているのだが、落ちついて眺めることも尠ないのがくやまれる。Y氏はいま功なり名遂げて故郷で余生をしずかに花と語っていられよう。

丘の公園の頂きにあるホテルについた。ホッと花の色と香いに酔い、でてきた美しい女の人から幾許かの仕事の駄賃をうけとり、しどろもどろに礼を言って、萩の花の艶麗な美しさを一言讃美しその女のひとに語ってやらねば、余りに無風流な朴念仁に思われないかと、どんなに首をかしげても「ハギ」という名称が頭のなかではちゃんとわかっていながら言葉となってでてこない。ひどい重症の失語症！

この頃、私の肉体にまたは精神に不思議と起ってくる変調な「老い」の現象の一つであろうか。胸が皷動をはずませ私は威圧する豪壮なホテルの門を辞して帰路についたが、萩の道を帰る時は羞しかった。

――四七・八・三一――

私の植物誌 (六) 桧

外に出ると、近所の人たちが集まり手伝って、
隣家の桧の樹が伐り倒され雪が降っている師走の路上に
　横たえられ、
かんかんと斧で枝が払われていた。
樹勢の盛んな樹で切り口が約三十五、六糎、
人間ならどくどくと紅い血をふきだしているであろう樹
　液の、
青い匂いがむごたらしいまでに漂っている。
「ありア！　惜しいことをしたな。」と咄嗟に頭の中を愛
　惜の情が稲妻のように流れた。
すぐ傍にいながら仕事場で仕事に追われており、

この伐採の騒ぎを知らずに過ぎたうかつさが、
自責への悔みとなって胸がかきむしられるようだ。

あとから噂に聞くと、
隣家には男の子が二人いるのだが、何かと病いに弱く、
よく理由もなく寝込むことがあるので、
それは私も日ごろ知っていたが――
物知りの近所の女の人が
「家のそばに大きい桧の木があって枝を拡げ
屋根を覆うように拡がっているせいかも知れんぜな、
思いきって伐ってしまいないよ。」と、すすめたとかで、
家人の意見が一致し、家主の諒解も得たということだ。
私は家屋の西北の路沿いに生えている桧は、
家へ日影も作らず、住まいの健康には変らないと思って
　いるのだが。

迷信のように思いこまれた子供への愛情には、
口をはさむことも、すでに伐り倒されて処理された樹木
に対し何の言葉もない。

ここに引越して二十七年、戦いに敗れた年の秋、幼かっ
た四人の子供をつれ、
疎開の土地から居を移してこの倒された桧は無言に私を
力づけてくれた。
勢いのよい素直に伸びた街のなかの目じるしの桧、
そのてっぺんには鵙(もず)や黒鶫(くろつぐみ)、鶸(ひわ)や鶯や雀まで、
山王の杜からちかくかっこうの散歩道らしく、
小鳥たちは季節々々翔んできて饒舌に歌をうたってくれ
た。
自動車が我がもの顔に氾濫し排気ガスを撒き散らし傍ら
を通るようになっても、

桧は超然と孤高にたくましい成長をつづけた。
ある時は子供たちの成育になぞらえて夢を托し、
ある時は人生の指標と無言の励ましと勇気を与えてくれ
たのに。
その桧はいま一言も私に語らず反撥も加えず、しずかに
横たえられている。
老齢の域に入りかけて気弱くなっている師走の、
霏々と雪のふる私の肩にこの冬は非情で、
大樹はもはや庇護の手を伸ばしてくれない。

——四八・一・一五——

私の植物誌　(七)　彼岸花

――簇りて咲くシビト花焔のごとし明日香の径は
昼闌けにつゝ――　　鎌手白映

いつの年からか裏畑のすみにこの花が咲くようになった
きまって秋の彼岸が近づいて遠い親たちへの回想に記憶
　が甦える頃
長い緑の茎の先に髪挿しの花に似て
楚々と朱い線が明るく咲いている
手をひかれた母の彼岸の墓詣りの道などで
この花は朱く草蔭に遠慮ぶかく咲いていたが
なぜか母は採ることを嫌っていた
花の首がかぼそくて折れ易く
また墓地のちかくに咲く不吉な花であったろうか

この球根を摺りつぶして足の裏などに貼ると
腎臓の悪い病者の民間療法によく効くというので
妻は幾たりかの人に掘り起して進呈したが
また涼しい秋が訪ずれると性こりもなく
生き継ぎた証に朱い花をつけている。

――四九・九・二五――

私の植物誌 (八) 紫陽花

――ひとひとり通る影なく夜のしじま咲き極まれる紫陽花のはな――　読みびと不知

あなたはどこかへ姿をけしてしまわれた
私もきっとあなたの傍にゆくでしょう
あなたが紫陽花の樹を挿し木して
毛根のような幼ないいのちを備えた小さい苗を
持ってきて下さってからもう三十年は閲し去りました
家の前の柿の木の下に青葉が飛白(かすり)の模様を画いて
陰湿な酸性土壌の風土が直覚的に適地であると
教師であったあなたが知ってみえたのでしょう
不慣れな私の鍬を持つと手つだって移植して下さった
年が改まり移り過ぎ幾十度のすがしい夏を迎え

水量の豊かな梅雨の候になると
きまってみごとな薄い空色の藍をぼかした
水彩画の花群が咲き競って
日照りが二日もつづくと語りかけるように
私に水を注ぐよう呼びかける
ながい雨季の湿度の深いかびの生える時間を
じっとそこに佇んで堪えていられるのは
清楚なこの無言の励ましの啓示と
うけとめている所為と思うのです
あなたは既にみまかって語ることと
この花群を眺めることは不可能ですが
碧いこの花は非情にも移し植えられた土地で
柔順に定着の根を四方にはって
精いっぱいの花の群れを粧っている
いま想えばあなたの心ばえが

二重の重荷と　いいえ思慕となって襲ってきます
じっと雪霜にたえて花の咲くのを待つのです
柿の青葉の下に華麗な花が洗われるように咲き揃います
　と
二重にも三重にもあなたへの追慕の情が湧いて
時にあなたへの怨みの言葉が口に出ようとするのです
この花を戴いていなかったら
もう忘却の渕に押しやっているあなたであるかも知れま
　せん
無言の訴えをもって問いかけてくるこの心ない
花々の生きざまに私はどう応えればよいのですか？

――五二・六・二五――

私の植物誌　(九)　八つ手

――窓の外に白き八つ手の花咲きてこころ寂しき
冬は来にけり――　　島木赤彦

初旅といっていい独りの慣れぬながい旅であった
不遜のように若気の志に溺らせたが
真の底にはどうにも自分で処理できない
絶望の果ての野望のような行為であった
――この想いはながく後年まで私を悔やませた――
記憶はいまも確っかりその日は昭和五年十一月十五日
その前日まで会社の給仕に働いていたが
故里の町を追われるように発った
東京へは二度目の二十歳の秋が
自決をしいられたように虚構の世界に飛びこませた

暗い北陸本線の三等車の堅い腰掛に
眠られぬ夜がまんじりともせず
移りゆく駅名を霧のかかった窓に読ませていた
軌道を走る車輪の音がゴットン　ゴットンと響いて
胃袋の底を撫で廻した――四、五日あとまでも
はやくも郷愁の父母への思念が涙もろく
引き返すにはもう矢は弦をはなれていた
浜口雄幸首相を狙撃の号外が街に飛び交い
満州事変のぼっぱつ一年前の日本が
不景気のどん底に呻吟する世相であった
故里のM鉱山は緊縮政策をとって
馘首に馘首をもって人員を減らし合理化が図られた
ここに残って生き抜く肝っ魂は普通人では
とうてい堪えられない生き方であった

きっしよーじ！　キッショージ!!　中央本線吉祥寺駅に
省線電車はがくんととまった
ここの井ノ頭公園には当時感動して読んだ
「あゝ　松本訓導」の碑が建っていた
遠足にきていた小学生が人喰川に墜ちたのを
救おうとして殉職した松本訓導の物語りで
井ノ頭公園の名を知っていた――
ここの小さい書店で働らくことになっていた
吉祥寺駅を重い柳行李を提げて不安な面もちで出た
十一月の風が冷たく詰襟服の私の雄図を
挫じかせるように非情に吹いて寒かった
古い駅の廂を出た　左側にそこで可憐な花に出会った
野球のグローブのような大きな八つ手の葉と
涼しく清らしく咲いて零れるように

あたりを明るくしている白い花の群れ
暫らく重たい行李を提げたまま佇っていた
その時はじめて見るこの花の名称も知らず
花のすくないこの季節寒さに負けずに花は
行きくれている私に無言の激励の言葉を与えてくれた

いま家の仕事場の前に一本の八つ手の樹を植えており
冬がくる十一月にきまって花を咲かせ
二十歳の日の無謀を叱ってくれる。

――五二・九・二〇――

私の植物誌 (十) アカシヤ

――世にめざむ憂悶の日々帰り路を花アカシヤの
白く匂いし――　読人不識

ロクロ　轆轤　六郎ともいった
近くには木地屋平という集落もあった
褐色に深くえぐられたロクロ谷が高原川へ
岩石や土砂を押し流し冬は格好のスキー場になった
川を流してきた材木がせぎで集められ
インクラインがのどかに廻っている時もあった
単調な軌道が南北に走っていて馬がそれらの物資を運んだ
アカシヤの並木は道に沿って砂防のため植えられたが
大正の終りころはじめてアカシヤの名を知り
珍らしくこれがと驚いたことを今も記憶している

茫漠とした北海道の原野が不思議と拡がり
アカシヤとなんの関連があったのだろう
白い藤の花に似た房々はほの甘く
詩歌に魅せかけられた少年を急に成育させ
夢をふくらませ可能な世のなかのように惑わせた
暫らくその下にたち高原川の瀬音に没入した
もう昔のこの並木のあったことなど
語りつぐひとも多くは死にだえ
脳裡に浮べる人もいなくなったろう

いまその辺り三井鉱山の大きい発電所が建ち
病院や亜鉛電解の工場が立ち並び
ふる里は異郷の土地のように変り果てた
しかし巡ってくる初夏が訪ずれると
きまって私の体内に白くうずいてくる憂悶の日が

あの時代の感傷にひたらせる。

――五三・三・二五――

私の植物誌 (十) 白菊

——こころあてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花——　凡河原　躬恒

畑の隅に手いれもしない捨て菊の茎のまのびた群生が
くる年ごと同じ位置に黙々と生きつづけている
まろく固い蕾をつけたのを見たのは九月の終りであった
すでに高い山脈の肌を激しく初霜がおりたとニュースが
　知らせ
冬がはやばやと山の背をくだることを
ながい生きる智慧で体得しているわたくしは
若しかすると開花をみせないでこのまま
緑の葉は黄色を帯び茎は枯れしぼんで
襲いくる暴力の白い圧迫に拉(ひし)がれてしまうのではないか

と
還暦をまぢかく控えた自分の境涯に似て
人間の言葉が理解されるものなら一こと
力づけてやりたい焦躁にかられていた

仕事に没入する日々が日課のようにつづいて
畑のすみの菊のことはいつか念頭から消えていたが
十一月もなかば過ぎて今年もまた世間の人たちが
その年に励んできた業蹟を展示する一つの区切りの季節
　に
畑に捨てられて誰も顧みない菊の傍らに寄っていった
あ　そこにみたものは不思議と晩い秋の輝く日を浴びて
小粒ながら精いっぱい絢爛と咲き香っている白い一群れ
　の菊たちであった。

——四四・一〇——

私の植物誌 (十二) カトレヤ

——ジャングルに夢と咲かむやカトレアは今わが
胸に大きくゆるる——　江越　千代子

我が家の畑につづいた路を距てて直ぐ傍らに
洋蘭園ができてから、二、三度私は
柵越しに温室の珍らしい花を観にいって
いつからか園主と挨拶するようになっていた。

その朝は——詳しく書くと昨年十二月一日
前夜から降りだした雪は朝になっても止まず
山の街の屋根を深かぶかと白く沈ませていた
嫁いでいる娘は昨日から日赤病院の産室で
予定日のこの朝生れてくる新しい生命の

誕生のために闘っていると思われるとき
件の園主は紙袋に大事に入れた一本の蘭の花をもって訪
ずれてきた
——荷造りのとき障って折らしたのじゃが、眺めて下さ
れ、美しい花じゃろが。——と言って
朴訥な人がらが可憐な花と対照して
雪が縞模様にふる背景に心が温かくじかに伝わってきた
この世の花とも思えない乳白色の造化の極致に
その時はまだこの蘭の名を知らなかったので
名を教えて貰うと、この花の名はすでに
私の記憶のなかに咲きつづけている憧れの花であった

十時二十五分　無事女児安産の報らせを電話が伝えると
私は七番目のこの孫の名前を
「蘭子」と命名しようと秘かに自分で心にきめていた。

——四八・一二・一〇——

私の植物誌 (十三) 花茗荷

——人知れぬ花いとなめる茗荷かな——草城
——つぎつぎと茗荷の花の出て白き——素十

平生の卓よりすこし賑やかな
こよい大晦日の年とりのおせち料理の
その味の最後の舌のうまかったと落ちつく
まがいものでない家庭の味は
やはり紅いろの鮮やかに色の増してきた
老妻の丹精につけこんだ品漬け
寒さのなかに徐々と自分を醸しだし
新酒のように馥郁と香って座を和(なご)ませる
寒い土地に生きてきた飛騨びとの知恵であるか
紅い蕪や瓜や茄子のあいだにまじり

花茗荷のしっとりと薄く紫紺に染った渋味
お酒の少しまわった口のなかを
さくさくと野趣ある風味は
一年を送る食卓になにによりふさわしい

いつの頃からか畑のすみの梅の木の下に
茗荷の花茎が生えるようになって
秋には淡黄色の唇のような花が咲き
よく採ってきて食膳に季節の匂いを粧ってくれた
茗荷を食べると飛騨では昔から
記憶力が減退する　健忘症になると
物忘れがひどくなると言い伝えるが
いま旧い年を送って沈澱と自分にまむかうとき——
手づけない重味のある新しい年を迎えようとするとき
茗荷の呪術にあずからなくとも

忘れてしまいたいことのなんと多かったこと
素朴なこの風趣は年齢のせいばかりではない。

私の植物誌 (十四) 秋海棠

――秋雨の雨間静けき古庭に露に映え咲く秋海棠――

香取秀真

あなたを想うと、いつもそこに秋がある。秋の精、秋海の花、あなたは秋海棠の花のようにいつも楚々と池畔の花咲くかたわらにたたずんでいた。

築山の稚ない松を背景に、高く落ちる水は噴水となって涼しさをひとしお増し、赤い鰭の緋鯉たちは群れをなして泳いでいた。ふたりのように不安も危惧もなく、ここでは世の中は童話の世界に似て明るく、おとな達のつくった掟も戒律もなかった。ふたりの親和を割く何ものもなかった。

はじらう少年の瞳に姉のようにやさしい言葉は唇から

乳液のように注がれた。長身な背に緑衣はよく似合い、桔梗の花をあしらった帯の模様が網膜にやきついている。秋海の花瓣のように、薄あかい唇は花のように笑っていた。

さぎりにぬれた秋海棠、宿命のようにあなたの体に秋海の精が宿っていた。やがて語る言葉の恐しく　迂廻して道を遠く少年は遠く都にあこがれて去り、あくせくと十年の月日が流れていった。

あなたの死を知ったのはやはり秋、胸をやんだその花は人の世の喜びも悲しみも知らないまま、純情の魂はどこへ吸われていったのか。

いくめぐり秋の訪ずれた今日、あの池畔で今年もまた非情の花は咲き静もっていよう。

——昭和二二・一〇——

私の植物誌　(十五)　花菫

——花すみれ咲きつづきいて久に訪うみ寺の路の
夕明りかな——　読み人しらず

娘の嫁いだ家に立ちよると
子供たちと遊びがてら山菜とりにいったといわれ
馬場のあとを横切り菩提寺のある道に向った
城の濠のあとは鋪装された道路にかわり
車はつぎつぎと流れるように走っている
ゆるい坂道をおりかけると
白い小粒のすみれが傾いた斜面に
絨氈を敷いて咲き乱れていた
こころなしかさっと匂いが
むせぶように鼻孔をくすぐってくる

すみれと思ったのは野芹の花かともみえたが
いずれにしても優しい好きな花たちであった
春がくれば五〇〇年を繰返し
祖(おや)たちの霊が見守るように咲きつづけてきた
江馬氏とともに落ちつき殿村といったこの部落に
興亡の歴史を花たちは語りつがれてきたのを知っている
坂の途中には同じ姓の名札の家も見かけた
私の祖父は分家して村を出て一〇〇年
いまもう交際している昔の親戚はいない
菩提寺へ向う草の小路は陽炎にたなびき
無心に白い花の送迎がつづいていた。

――五三・五・一五――

私の植物誌 (十六) 鬼灯

――草はらは物の怪の棲む思いして近よりがたく
鬼灯の群れ――　読みびと不知

鬼灯と書いてほうずきと読む子供は少なくなった
六、七年前まで母子寮が建っていた
家のすぐそばの高台の空地に薬草を採りにゆくと
雑草が腰のあたりまで伸び繁って
ひょっとしたら青大将や蝦蟇がひそみ
睨みっこをしているのではなかろうか
その繁殖のすごさに手をあげ言葉もない
登校への通りを僅かいりこんだ草地だが
怯えて誰も近づこうとはしない
前に住んでいた寮の親たちが移し残した

五、六本の鬼灯は蓬々とした草原の蔭に
時がくると乙女たちが粧って若者の注意をよぶように
身を焦しておいでおいでと提灯に火を点す

いまの子供は茱萸、李、桑苺などを盗もうとしない
ひもじかった少年の頃をおもうと
不自由なしに育ったこの頃の子供たち
恵まれた経済大国にのし上った
日本の子供は大切な宝玉のようなものを
取り逃しているのと違うのでは——
夢のあるロマンな風物が消えてしまっては
大地は荒れはてた不毛の土地でしかない

若かった母が秋繭(しゅうけん)の大繭の蛹から蛾にかえり
腕のよかった母のもとへはくず繭が集荷され

茶色の穴をあけてでた面倒な手数のかかるものばかりひ
いていた
大きな手製の七厘で鍋いっぱいゆで
手繰りの枠をカラコロと鳴らし根気にひいていた
綾とり糸のように器用につまみという
こぶこぶの糸が役得のように母の手もとにのこった
——このつまみ糸が欲しいばっかしに、このくずの大繭
をひくんじゃ。と
この糸にのべそといった真綿からとった糸をまぜ
冬になると手織り縞を昔風に織った
民芸風な母の手あかを織りこんだ縞の厚い布団を
ながく着て育ったのも懐しい

手繰りの枠を止めると流れる汗をふき
鬼灯の白い種を楊枝で手品のように抜いて

口に含み吹きならしては玩具の代りにつぎつぎつくり
不思議な瞳でかたわらに立って口許をみていた
三人の妹は大きくなっていった。

——五三・九・二〇——

私の植物誌 (十七) 梅擬（うめもどき）

——冬曇り小暗き庭に梅擬の実のみが赤く枝に残れり——

木村流三郎

この冬をむかえて初めて降った雪が
梅擬の朱い実を一そう赤くつぶらに光らせている
かつて昔その下で雛をつれた雌の雉子が三羽
禁猟区の山王の森から翔んできて
喜々と戯れ餌をあさっていた
硝子戸をあけても逃げもせず実を啄んでいる
柔和に澄んだ瞳の渕のような深さは
人間の誰もがもっているものではない
今日もまた三羽　あの時の鳥ではないが

雪をけちらし小さい脚跡を印し無心に遊んでいる
町のなかの家に囲まれた小さい木の朱い実が
どうして彼らにありかが嗅ぎつけられるのであろう
雪が森を白く埋めつくしたら
町のなかの赤い実のある庭を思い出させ
鳥語が言いつぎのように語られ習性で翔んでくるのか

この若木を探して糠塚の山をかけずり
採ってきた妻も額に深い年輪の皺を刻み
山に遊んだ同行の人もこの世には亡い人もいる
ここに移されて三十年は過ぎ去り
春には白い花を謙虚に咲きつぎ
冬になると朱い実を明るく鳥たちを招き
人びとに失ったものを語りかけようとする。

――五三・一二・二〇――

巻末に

昭和四十二年秋に出版した「薄暮記」のあとの作品のうちより五十二篇を自選してこの集を編んだ。（うち「私の植物誌」の「秋海棠」は昭和二十二年九月刊「山脈詩派」第三〇号に掲載）　多くは「飛驒作家」「すみなわ」その他当地の新聞に載せた作品である。掲載順序はだいたい制作順にしたが、編集の都合上、序列の違うのもある。

いつも思うことは、自分なりに、こうした心のなかに表現せずにいられない意欲といったもののとりこにされて作詩してきたが、果してこれが「詩」といえるものであろうかという疑問がいつも心に去来してならない。やはり明治に生れたという年齢的、感覚的、技巧の古さが、作品を陳腐なものにし、存在価値がないように思われ、出版ということに躊躇させてきた。この思いは今もかわらない。

人間が生きてゆく途上、時代が変遷し、社会の機構が改造され、人間の価値観が変っても、少しでも次代への人間につながってゆく、一つの定規というか、拠りどころというか不易なものがなければ寂

しいし、一時の流行とかを超越して、真に人間が生きる上の米塩のような摂取しなければならない要素のようなものがなければ生きてゆけない。人間性に訴える作品があるはずである。なければこの人生はさみしくてならない。こうしたせめて一日でも二日でも読者の記憶のなかに、人の胸のうちに少しでも棲みつきたい――これがものを書く人のいつわらない冀願ではなかろうか。

このごろヘルダァリーンの「しかし、詩人はあとに残るものを築かねばならぬ」の言葉が警鐘のように迫ってきてならない。理窟ではよくわかっていながら、貧しい生きかたの残骸を恥ずかしく記録として晒らすことになった。

この詩集を出版するに当って「すみなわ」の同人諸兄の助言や励ましの言葉に力づけられ、長男夫婦の製版、印刷の理解ある積極的な協力によって、日の目をみることになったので記して感謝したい。これで一つの区切りができたが、この整理に満足せず、足かがりとして頑張らねばと、自分に言いきかせている。

昭和五十四年三月窓外に雪のふる日

目次

道　3
埋没　6
生と死と　8
幸せ　10
生きる　12
明治の人　14
愛情　16
晩菊　18
孫を抱いて　20
柿の木　22
机そして本箱　24
秋夜抄　26

春愁 28
好日詩抄 30
山峡詩譜 32
お正月 34
世襲のように 36
生命いとしく 38
録音記二題 40
高山詩抄 42
冀願 45
予告 48
無題 51
夜の記録 54
慕父抄 56
晨の記 58
祭礼の夜 60

故郷詩譜(一) 62
故郷哀慕 64
故里の歌 66
朝 69
故郷詩譜(二) 70
野麦峠 72
海を渡って 74
海辺で 76
私の植物誌(一) 梨 78
私の植物誌(二) いちい 81
私の植物誌(三) 這い松 85
私の植物誌(四) 芙蓉花 91
私の植物誌(五) 宮城野萩 94
私の植物誌(六) 桧 98
私の植物誌(七) 彼岸花 102

私の植物誌 (八) 紫陽花 104
私の植物誌 (九) 八つ手 107
私の植物誌 (十) アカシヤ 111
私の植物誌 (十一) 白菊 114
私の植物誌 (十二) カトレヤ 116
私の植物誌 (十三) 花茗荷 118
私の植物誌 (十四) 秋海棠 121
私の植物誌 (十五) 花菫 123
私の植物誌 (十六) 鬼灯 125
私の植物誌 (十七) 梅擬 129
巻末に 132

和仁市太郎既刊詩集

暮れゆく草原の想念　昭和八年八月十日刊　自家版
石の独語　昭和十四年二月十五日刊　山脈詩派社版
禁猟区にて　昭和三十三年四月二十日刊　山脈詩派社版
薄暮記　昭和四十二年十一月三日刊　山脈詩派社版

和仁市太郎略歴

明治四十三年六月、岐阜県吉城郡船津町(現神岡町)に生れる。大正十二年三月、船津町尋常高等小学校小学校課程を卒業。昭和二年三月、同校併設の補修夜学校を卒業。

「山脈詩派」「飛騨文学」「飛騨作家」「詩と民謡」「詩宴」など幾つかの詩誌の同人となり、また編集発行をして現在詩誌「すみなわ」の同人。

著書には別掲の詩集四冊がある。かつて中部日本詩人連盟の会員たりしことあり。

詩集　私の植物誌　　頒価一三〇〇円

昭和五十四年六月　十　日印刷
昭和五十四年六月二十五日発行

著者及
発行人　高山市森下町一丁目三五番地　和仁市太郎

印刷所　高山市森下町一丁目三五番地　美踏社印刷　電話　三二一―三五六九

発行所　高山市森下町一丁目三五番地　すみなわ詩社　振替口座名古屋五六五〇七番

1213
911.5

—— 詩集 私の植物誌 ——

〒506 高山市森下町1丁目35番地

和 仁 市 太 郎

TEL〈0577〉32−3569

謹啓　梅雨ばれのひと時は緑濃く初夏の趣きひとしお強く感ぜられる季節になりましたが、いよいよ御清健のこととお慶び申し上げます。
さて、このたび約十年間の詩作品をまとめ拙ない詩集を編みましたので贈呈いたします。
お暇のおり御笑覧下され、御感想など戴ければ幸いに存じます。
日頃の御無礼をお詫びかたがた御挨拶申し上げます。

敬白

昭和五十四年六月

和仁市太郎

平光善久様

54.7.2

郵便往復はがき

500-□□

岐阜市北一色六丁目一番七号

平光善久様

54.7.17

和仁市太郎詩集「私の植物誌」出版記念会

盛夏の候ご清栄のことと存じます。

さて、このたび和仁市太郎氏の第五詩集「私の植物誌」が出版されました。詩歴五十年、ますますさかんな意欲に燃える氏が、友人、知人、当地文学仲間の待望に応えられた詩集であります。

本詩集の出版を記念し、同氏を囲み一夕歓談の機を得たくご案内申しあげます。

記

日　時　八月十一日(土)午後三時から五時まで

場　所　高山グリーンホテル(高山市西之一色町二)
電話　〇五七七―三三―五五〇〇(代)

会　費　三千円

(七月二十日までに到着するようご投函ください)

昭和五十四年七月十五日

発起人　九　月　会

飛騨作家の会

すみなわ詩社

郵便はがき

500-□□

岐阜市北一色六丁目
一番七号
不動工房
平光善久様

54.8.16

高山市森下町1-35
和仁市太郎

506□□

（ちかいうち子供たちの写真お届けします。）
このたび遠いところ、しかも暑さきびしい折り
おいとうございて詩集出版記念会にご出席
下され、ご懇志情あふる御祝辞を頂戴
しましたこと、いやが上にも、私の詩作の生涯に
華をお添えくださったこと、身に余る光栄と
思っています。昨日、今日去暦したような
心境で、ほっと、仕事も手につかない状況です。
なお、お土産まで頂いて重ねがさね恐縮
おります。土日の夜は落付いてお話も承る
ともなく失礼いたしました。なにかお預けと
思いながら連絡もつかず、そのまま地名物の「三
島豆」一個小包にて発送しましたので、ご賞味
下さい。先は略儀ながら市案内とお礼迄

朝ゆうは少し暑さも薄れた感じですが、まだ日中は残暑が厳しゅうございます。そのご御清健のことと拝察いたします。

扨てこのたび、第五詩集「私の植物誌」を出版いたし、臆面もなく贈呈しましたところ、却って御配慮をわずらわし、またご多忙のところ出版記念会に御出席下さるなど、お祝いいただきまして有難うございました多年の宿願を先輩友人諸兄の御厚情によってまとめることができまして筆舌に尽せない感激に浸っております。

今後も情熱を燃やし一層詩作に励み、過去ながい間の御指導と御厚情に報わなければと心に期しております。

実は参上拝眉の上篤と御礼申し上げるのが本意ですが、失礼をも省みず寸楮を以って深く御礼申し上げます。

まだまだ暑さがつづきますので御健康に充分留意され、御自愛のほどをお祈りいたします。

昭和五十四年八月 吉日

〒506 高山市森下町一丁目三五番地
電話（〇五七七）三二一—三五六九
和仁市左郎

またひ遠くかく お出掛け下され、熱勢あつ お祝辞をくれられ おみやげ頂戴して有難うございました。感謝致します

郵便はがき

500-□□

日本郵便 20 NIPPON

郵便番号をお忘れなく

岐阜市北一色
六丁目一番七号
平光善久様

54.8.21